# すべて世のため、後のために
# 塙保己一とヘレン・ケラー

文／堺　正一　絵／吉澤みか

桜雲会

**「わたしは挫折しそうになるたびに、塙保己一先生のことを思いだして、立ち直ることができました。そして、現在のわたしがあるのです」(ヘレン・ケラー)**

江戸時代に生まれ、視覚障害を持ちながら、国学者として大成し、さらに盲人社会の最高位である総検校までのぼりつめた偉人、塙保己一。かれは、幾多の困難にも負けずに、学問の基礎となる歴史資料を提供することに全人生を捧げました。

保己一の生きざまにはすべて「世のため、後のため」の理念があり、その理念を未来に向けて訴え続けました。生涯にわたり「群書類従の編集」「和学講談所の運営」に携わり、人格者である保己一のまわりには多くの人たちが集い、身分や立場を超えてその活動を支援しました。

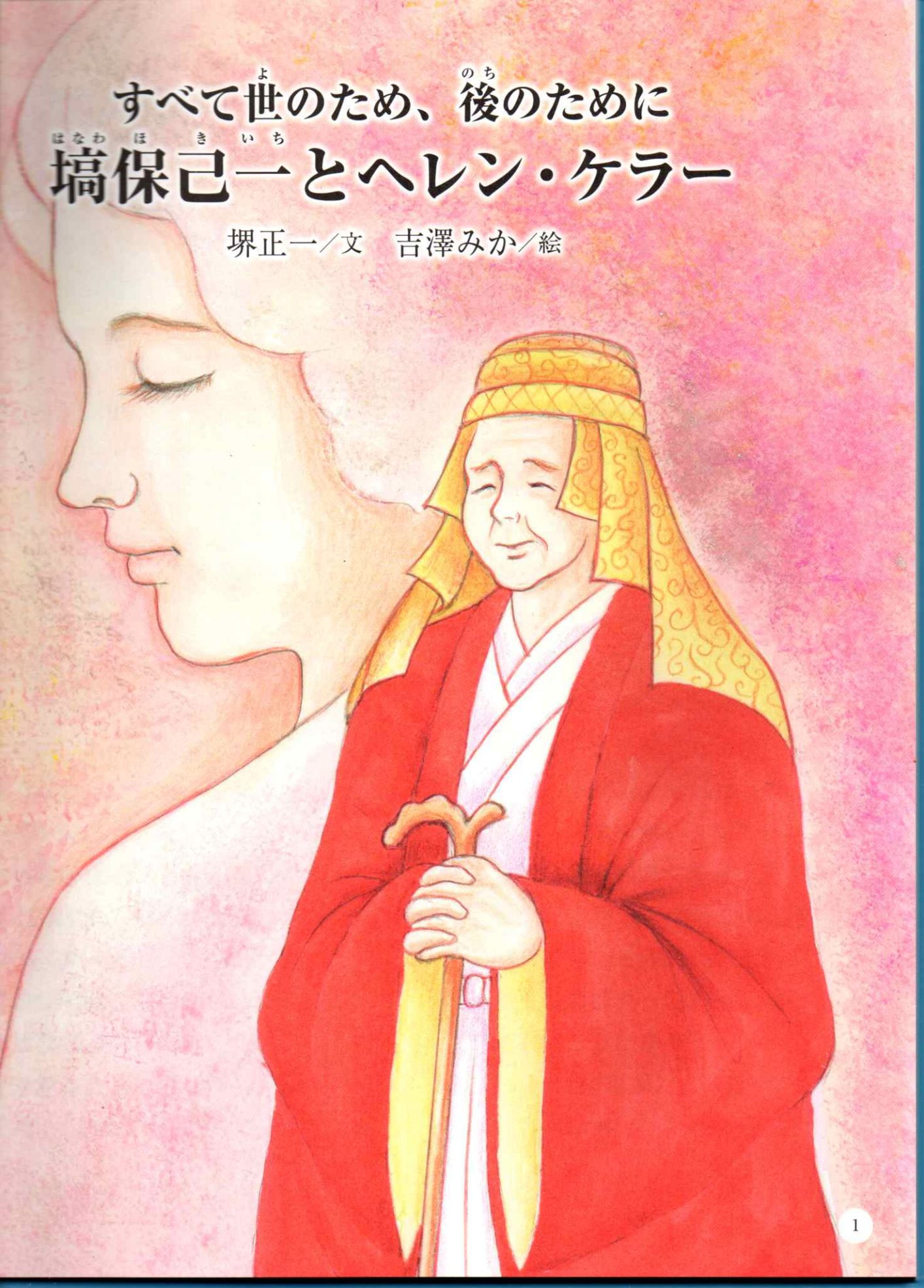
この絵本を通して、ヘレン・ケラーが人生の目標とし、こころの支えとした塙保己一の生涯を知ってもらえたら、たいへんうれしく思います。

# 今に生きる

堺 正一

# すべて世のため、後のために
# 塙保己一とヘレン・ケラー

堺正一／文　吉澤みか／絵



# はじめに（ヘレン・ケラーが心の支えとした日本人）

多くの偉人伝が出版されていますが、目も、耳も、ことばも不自由だったアメリカの女性ヘレン・ケラーは、その代表的な人物の一人です。

重度の障害者であるヘレンが3度も日本を訪れています。昭和12（1937）年の最初の訪問は、すでに57歳のときでした。「人生わずか50年」といわれた時代です。サンフランシスコから、日本の〝浅間丸〟に乗り、15日間の船旅の疲れをいやす間もなく、東京・渋谷の温故学会（塙保己一史料館）を訪問しました。

つづいて、その感動を胸に浦和の埼玉会館で講演をし、満員の聴衆に向かって、こう話しだしました。

「わたしは挫折しそうになるたびに、塙保己一先生のことを思いだして、立ち直ることができました。そして、現在のわたしがあるのです。いつか日本に行き、わたしの人生の目標である塙先生の故郷の埼玉を訪問したいと思っていましたが、今日その願いがかないました」

実は、ヘレンは子どものころから、母親にこの日本の盲目の学者のことを聞かされて大きくなったのです。母親は、いつも、こう話してくれました。

「日本には、幼いときに失明したのに、努力してりっぱな学者になった〝塙保己一〟という先生がいます。点字も盲学校もない時代、本を読んでもらって、暗記するほかはありませんでした。でも、あなたはちがいます。自分で読み書きできる点字もあるし、盲学校や聾学校もあります。それに、いつもそばにいて、助言してくれる家庭教師のサリバン先生がいるではありませんか。つらいことがあっても、塙先生のことを思いだしてがんばりましょうね」

＊

明治時代には、この少女のことは日本の教育界にも伝えられ、「どんなに重い障害があっても、教育の機会が保障されさえすれば、ひとりの人間としてりっぱに成長できる」ことが証明され、大きな話題になりました。

それでは、ヘレン・ケラーが人生の目標とし、こころの支えとした日本人とは、どんな人物だったのでしょうか？

※塙保己一の名は、一生の間に何度も変わっている。混乱をさけるために、この本では、子ども時代は「辰之助」、江戸に出て学問を始めるまでを「千弥」、学問の道に進んでからは「塙保己一」と表記した。

講演で塙保己一への思いを話すヘレン・ケラー。

## おわりに（未来へ希望をつなぐ）

塙保己一を人生の目標としたというヘレン・ケラーですが、自分の生涯をふりかえり、次のように言っています。

「わたしは、すすむべき道に迷ったときには、よく林に出かけました。そんな木々の間を歩いていると、いつも、暗い土の中で、元気にがんばっている根がうたう歌が聞こえてくるのです。〝木々の根〟は、自分ががんばって咲かせた美しい花を、自分では見ることができないのですが、決して不平を言わないのです」（ヘレン・ケラー『私の宗教』）

ヘレンは人々の〝幸せ〟を支える〝根〟の役割を演じて生涯を終えました。ときには「三重苦の聖女」とたたえられ、ときには戦争反対を唱える「非国民」と激しい非難を浴びせられましたが、「すべての人に幸せを！」という信念は少しもゆらぐことはありませんでした。

それでは、保己一はどうでしょうか？

国学の四大人（四大国学者）として、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤があげられますが、〝国学者・塙保己一〟の名はありません。

保己一は、この表舞台で活躍した四人の学者とは対照的な道をえらびました。学問の基礎となる正確な歴史資料を提供することに全人生をささげ、多くの学者たちの研究を土台から支えたのです。学問全体の発展のためには、だれかがこの役割をはたさなければならないと考えたからです。

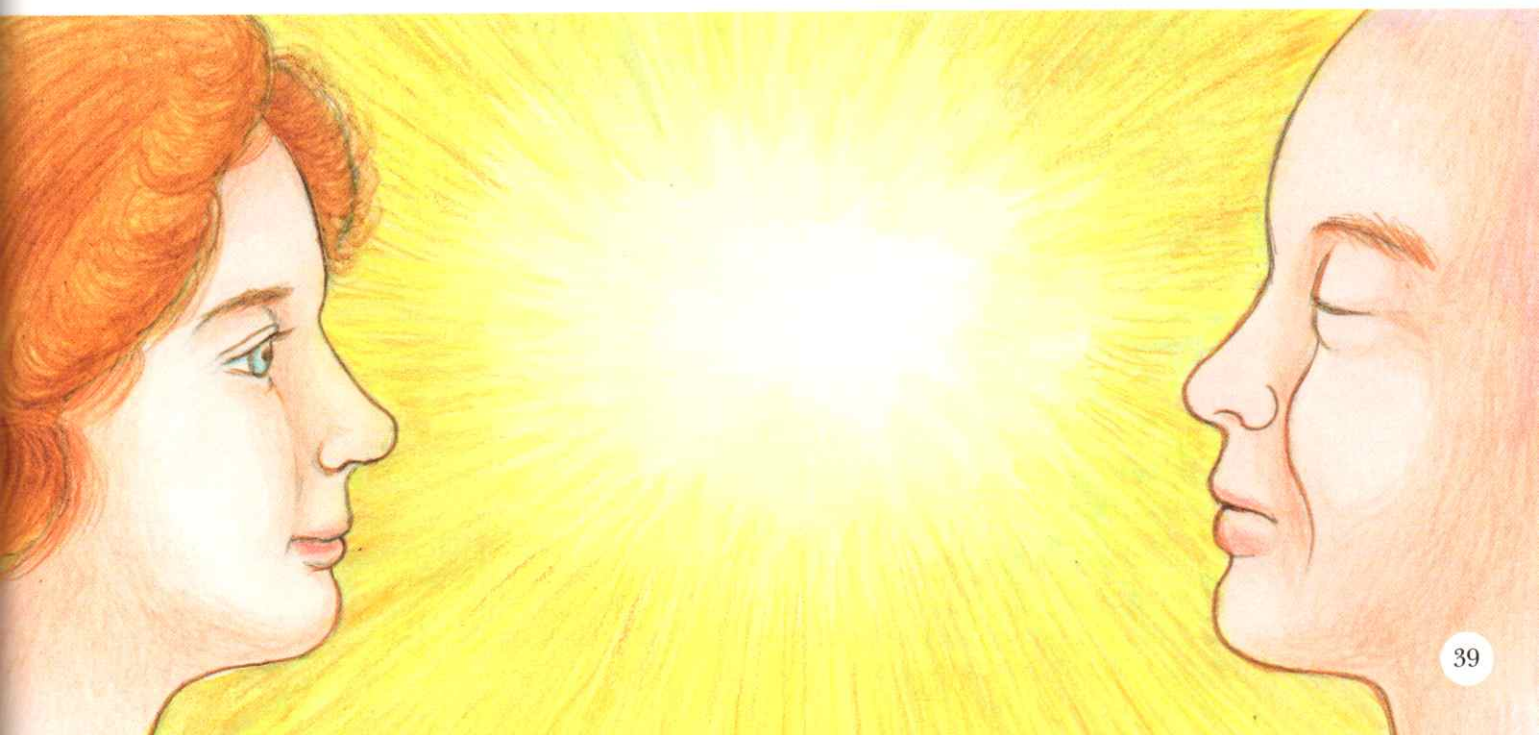
旗本と同等ともいわれた〝検校さま〟といえば、金をためこみ、権威の象徴である紫色の豪華な衣と派手なかぶり物で身をよそおい、背の高さほどもある検校杖を手に、供を連れて街にくりだしていたのです。そんな姿を見なれて

たがいに向かい合う、ヘレン・ケラーと塙保己一。二人の偉人に光が注がれている。

いた人たちは、いつも木綿の普段着姿の保己一が本を風呂敷にくるんで背に負い、杖をたよりに街なかを訪ね歩く姿に、親しみと敬意を覚えたにちがいありません。

ここでも、日本とアメリカの二人の偉人のあいだには、どんなときでも〝卑下せず、おごらず、ありのままに生きる〟という共通した姿が見えてきます。

21世紀は「共生の100年」「福祉の世紀」といわれますが、今こそ、〝世のため、後のため〟を目標に、未来をも見通して訴えつづけた塙保己一とヘレン・ケラーの二人の偉人に、もう一度目を向けてみてはいかがでしょうか？

心身に障害のある人たちは、常に社会の少数者です。同じ社会の一員として、〝誰ひとり取り残さない社会の実現〟は、21世紀に生きる私たち一人ひとりの願いであり、責任です。塙保己一とヘレン・ケラーの願いは、そのまま今日のSDGs（持続可能な開発目標）＊の時代に生きる私たちへのメッセージではないでしょうか。

＊今のままでは、地球は立ちゆかないほど危機的な状態にある。日本政府は「（SDGsとは）持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人取り残さないことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます」と発表している。